

ISBRA KANTO

公益社団法人日本農芸化学会

2023年度 関東支部大会

報告者 竹中 麻子(明治大学農学部・農芸化学科)／令和5年9月11日

令和5年8月25日(金)、明治大学生田キャンパスにて2023年度支部大会が開催されました。参加者のワークライフバランスを考慮し、今年度は例年の土曜日開催を金曜日開催に変更して行いました。昨年度に引き続いての対面開催となり、200名を超える皆さま(一般94名、学生156名)にご参加いただきました。



9時40分より伏信進矢支部長の開会の辞の後、9時50分から11時30分まで、1時間の昼休みをはさんで12時30分から14時10分まで、メディアホールで18題の口頭発表が行われました。発表時間9分、質疑応答2分という時間でしたが、農芸化学の幅広い分野から興味深い発表があり、活発な意見交換の場となりました。農芸化学会の大会とは異なり、多くの分野からの発表を一堂に会して聞くという、支部大会ならではの機会となりました。

14時25分から16時5分までは、第二校舎A館4階のエレベーターホールでポスター発表が行われました。ポスターの発表件数は90件で、偶数・奇数演題についてそれぞれ50分のディスカッションタイムを取りました。熱気にあふれた活発な議論が制限時間ぎりぎりまで交わされました。



その後会場を再びメディアホールに移し、16時20分から30分までダイバーシティ関連イベントが行われました。ダイバーシティ推進委員会の野尻秀昭委員長から、「農芸化学会のダイバーシティ推進の現状と課題」と題して、学会の現状についてご紹介いただきました。引き続き行われる女性研究者の受賞者講演につながるお話となりました。今回の支部大会では、ダイバーシティ推進活動の一環として、冊子「農芸化学分野のロールモデル集」の配布も行いました。

JSBBA KANTO

16時30分からは、3月の農芸化学会2023年度大会で受賞された4名の先生方にご講演をいただきました。

農芸化学女性企業研究者賞をご受賞された堀米綾子先生(森永乳業株式会社)からは「ヒトに棲息するビフィズス菌を中心とした腸内環境に関する研究」について、農芸化学女性研究者賞を受賞された八波利恵先生(東京工業大学)からは「極限環境微生物が生産する極限酵素の機能解明とその応用」についてご講演いただきました。研究成果に関する内容に加えて、女性研究者の視点からのコメントもいただくことができました。

引き続き、農芸化学技術賞をご受賞された福田隆文先生(キリンホールディングス株式会社)から「認知機能改善と体脂肪低減作用を有する熟成ホップの発見と事業応用」について、大野和也先生(森永乳業株式会社)から「認知機能改善作用を有するビフィズス菌MCC1274の開発と事業化」についてご講演いただきました。基礎研究から事業化まで幅広い内容についてご紹介いただき、大変勉強になりました。

伏信支部長の閉会の挨拶の後は、会場を食堂館2階に移し、懇親会が行われました。今年度はコロナ禍前と同じように、多くの皆さまをお迎えして賑やかに開催いたしました。一般47名、学生86名、合わせて133名の皆さまにご参加いただき、和やかな情報交換の場となりました。



懇親会の席では、学生会員が発表者である講演を選考対象として優秀発表賞の発表が行われ、高い評価を得た口頭発表部門の3名、ポスター発表部門の18名にそれぞれ賞状と副賞が授与されました。優秀発表賞については後日追加審査を行い、ポスター発表部門で2名の受賞者を決定しました。

残暑が厳しい1日でしたが、多くの皆さまにご参加いただき、盛況のうちに終了することができました。

末筆ではございますが、ご参加いただいた皆さま、ご講演くださいました皆さま、関東支部大会開催・運営にご協力いただきました皆さまに厚く御礼申し上げます。